

## 引き際のデザイン

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会  
会長 田中 宏



豊臣秀吉の死後、1600年に石田三成との関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は1603年征夷大將軍に任じられ、江戸幕府を創設した。そのわずか2年後の1605年に將軍職を辞し、秀忠が次の征夷大將軍に任ぜられた。その後、1616年75歳(数え年)で死去。それまで想像を絶する苦勞をしてきたにも関わらず、あっさりと將軍の座を明け渡したことが、後の江戸幕府264年続いた要因の一つだという歴史的な学説も論じられている。

現代社会において、私たちの身近なところにさまざまな役職があり、常に「引き際」という場面に直面する。周囲から望まれて役職に残る人や残念ながら望まれないのに居座る人、さまざまな人間模様がある。ただし、地主に関しては例外である。死去するまで地権者であり続けるため、個人名義の不動産賃貸業だけは事情が異なるが、一般的に会社組織やボランティア団体などは、組織や自分の意思で引き際を決めることができるのである。

引き際を美しくすることはさまざまなメリットが生まれる。リーダーが引退した後、人の流動性が生まれ組織が活性化し、そして、そのリーダーの英断は後世で高く評価されることになる。場合によっては引退後に別のフィールドでさらに活躍の場が訪れることさえある。つまり良いことだらけなのである。しかしながら、引き際を間違えた場合には全ての歯車が逆転する危険性をはらむのだ。

私の経験上、自分がやりたいことと、自分が

周りから求められることが異なる場合は珍しくない。その場合、自分がやりたいことよりも、求められることをする方が周囲からは当然喜ばれることになる。そのためには、組織のために自分に何が求められ、何ができるのかを知り実践することが必要だ。

人生100年時代といわれる今、引き際を見極めなければならない場面が幾度となく到来することだろう。

ある友人に教えてもらったことがある。「異性に振られた時こそ、別れ際には相手を優しく思いやることで、相手の心にいつまでも美しく残るものである」残念ながら異性関係に疎い私は実践することはなかったが。

引き際を美しくするためには、まずは自分が次にやるべきことを明確にすることだ。そうすれば、次のステップに早く進みたいという思いから、気持ちに余裕が生まれ、周囲に喜ばれるよう配慮することができるようになる。

それでは具体的に引き際をどうデザインするかを考えてみる。

まずは、引き際のタイミングである。

将来のビジョンと実行プロセスが描けなくなった時はそのタイミングだと考えている。世間では「長期政権の弊害」と揶揄することをたびたび耳にするが、私は長期政権そのものが問題なのではなく、ビジョンやプロセスが描けないことの方が問題だと考えている。従って長期政権という理由は、要因であって原因ではない。ま

た周囲は社交辞令で「辞めるなんて言わないでくださいよ」と言ってくれることがある。大変にありがたく受け止めるが、冷静な視点で情勢を見極めなければならない。

次に引継ぎに関して述べる。

これまでの経験で、全ての業務に言えることであるが、文章や口頭で引き継げるのは2割から3割程度だと感じている。では、残りの約7割をどのようにして引き継ぐかであるが、その7割のほとんどは「感性」によるところが多い。誰にどのように相談を持っていくか、相談相手や話の持っていき方を間違えれば通話も通らなくなることが多い。また現場レベルでも、相手の思考パターンや行動パターンを読み、先手を打つなど、これに関しては文章化することや口頭で伝えることは難しい。よって時間をかけて、自分の仕事を共有することが最善策だと考えている。事案を共有し、なぜ、このような判断になったのか、なぜ、このような結果になったのかを一緒に体感していくことが必要だと考えている。さらに言えば、役職に就いたときから引継ぎが始まっていると考えたほうがよい。

前述で少し触れたが、自分が次にやるべきことを明確化することが必要だ。引き際の年齢は組織によってさまざまであるが、多くの人は60歳前後を機に訪れる。

国民的なキャラクターであるサザエさんに登場する波平さんは54歳という設定だ。サザエさんの放送開始が1969年（昭和44年）であり当時

の平均寿命は男69歳、女75歳である。比較して、島耕作さんは2002年の54歳当時は取締役という設定だ。当時の平均寿命は男78歳、女85歳である。ちなみに、2022年の平均寿命は男81歳、女88歳である。これらのデータから見ても、人生100年時代において、「60歳まで」ではなく「60歳から」であることは明らかである。

つまり、これから生きる私たちはセカンドキャリアを考える必要があるということだ。診療放射線技師を軸としてもよし、教育者としてもよし、学術や公益団体の組織運営に携わるもよし、また全くの別世界でチャレンジするもよい。これからは、生き方という面でも多様性が求められる時代に変化したのだ。それには当然ながら準備期間が必要になる。現役世代はどうしても目の前のことが楽しく夢中になりやすい。もちろん与えられた責務を極めることは重要であるが、それと同時に50歳代以降に自分が次にやるべきことを探すことが必要だ。そのためにはまずは情報収集が必要だ。世の中にどのようなニーズがあり、どのような生き方をしている人たちがいるのか。それを知ることは将来のセカンドライフイメージを作るきっかけになるはずである。

私は平成3年に取得した行政書士を活用して、これまでお世話になった医療はもちろん教育などの分野で法的な知識を活用し、社会の役に立てたらと考え現在準備中である。

これが、私の引き際のデザインである。